みる
はかい
ぶんかい
なおす
さいこうちく
かわる

横浜美術館中高生プログラム2020

ヨコトリ2020を体験しよう!伝えよう![概要]

約7ヶ月にわたる中高生対象の長期プログラム。プログラム前半は、中高生がヨコハマトリエンナーレ2020の作品やアーティストとの出会いを通して、現代美術の様々な見方や楽しみ方を体験した。後半は、その体験をもとに関心のあるテーマを設定し、テーマを深めるための様々な活動をグループごとに実施した。プログラム終了後、番外編として有志が本誌の編集にあたった。

日程　2020年8月23日[日]〜2021年5月30日[日]
[本編10回＋番外編2回]
会場　横浜美術館8階｜展示室｜オンライン
対象　中学生｜高校生
参加費　500円
参加人数　17名

★第1回｜はじめに
8月23日[日]13:00〜16:00
- スタッフ紹介、自己紹介
- プログラムの目的と概要の説明
- ヨコハマトリエンナーレ2020の概要について
レクチャー／講師：関 淳一
(横浜美術館 主席エデュケーター)
- 青野文昭さんの作品をみる
◎参加人数13名

★第2回｜アーティストと出会う ❶ 青野文昭さん
9月6日[日]13:00〜16:00
- レクチャー／講師：青野文昭
(ヨコハマトリエンナーレ2020参加アーティスト)
- 新井卓さんに聞きたいことを考える
◎参加人数15名

★第3回｜アーティストと出会う ❷ 新井 卓さん
9月20日[日]13:00〜16:00
- 各自取り組んだフィールドワークの共有
- インタビュー／講師：新井 卓
(ヨコハマトリエンナーレ2020参加アーティスト)
◎参加人数15名

第4回｜ヨコハマトリエンナーレ2020を知る、みる、話す
10月4日[日]13:00〜16:00
- ヨコハマトリエンナーレと現代美術
レクチャー／講師：蔵屋美香(横浜美術館館長・横浜トリエンナーレ組織委員会副委員長)
- ヨコハマトリエンナーレ2020の観覧
- 作品について話し合う
◎参加人数15名

第5回｜アーティストと出会う ❸ 竹村 京さん
10月11日[日]13:00〜16:00
- ワークショップ／講師：竹村 京
(ヨコハマトリエンナーレ2020参加アーティスト)
◎参加人数10名

第6回｜「みる」ことについて考える
11月8日[日]13:00〜16:00
- ワークショップ／講師：広瀬浩二郎
(国立民族学博物館准教授)
◎参加人数14名

第7回｜前半の振り返り、グループ分け
11月22日[日]13:00〜16:00
- 前半の振り返り
- グループごとに取り組むテーマと内容を考える
◎参加人数12名

第8回｜グループワーク
12月13日[日]13:00〜16:00
- テーマを深めるための実験、
ワークショップ、フィールドワーク①
◎参加人数11名

★第9回｜グループワーク
2021年1月31日[日]13:00〜16:00
- テーマを深めるための実験、
ワークショップ、フィールドワーク②
◎参加人数13名

★第10回｜成果発表会
2月28日[日]13:00〜16:00
- グループワークの成果発表
ゲスト：広瀬浩二郎(国立民族学博物館准教授)
◎参加人数14名

★番外編1｜記録誌をつくる ❶
5月9日[日]13:00〜15:00
- 記録誌のアイデアを出し合う
◎参加人数4名

★番外編2｜記録誌をつくる ❷
5月30日[日]10:00〜11:30
- レクチャー／デザインとは?
講師：森上 暁｜田中あづさ｜髙木沙織
(NDCグラフィックス)
- 記録誌のアイデアをプレゼンテーション
◎参加人数4名

★のついた回はオンラインで実施

発行にあたって

この冊子は、ヨコハマトリエンナーレ2020「AFTERGLOW―光の破片をつかまえる」（以下ヨコトリ2020／会期：7月17日―10月11日）の関連事業「中高生プログラム2020『ヨコトリ2020を体験しよう!伝えよう!』」の記録誌である。横浜トリエンナーレとは、3年に一度横浜を舞台に開催する現代アートの国際展である。● 2020年4月7日、緊急事態宣言が発出され、不安を覚える中で、私たちスタッフは当プログラムの実施の可否や実施方法の変更について検討を重ねた。結果5月24日を予定していた当プログラムのスタートは、大幅に延期、8月23日に初回を迎えた。実施した全10回と番外編2回のうち、中高生が実際に来館できたのは10月～12月の5回のみ。初回を含め、半分以上がオンライン実施となり、スタッフや講師は横浜美術館から、中高生は自宅からの参加となった。過去の開催ではこのプログラムを構成する重要な要素として、自分たちの体験を小学生に伝えるアウトプットの活動、「こども探検隊」（小学生の参加者に向けて中高生が企画する展覧会ツアーと作品制作のワークショップ）を実施してきたが、今回はこれに代わる後半部分について、内容を大きく転換せざるを得なかった。● プログラムの前半部分では、これまでと同様にヨコトリ2020を観覧し、3人のアーティストや、専門家たちと出会うインプットの活動を行った。大きく変更した後半部分では、参加者が3つのグループに分かれて興味や関心をもったテーマを発展的に探究していくことになった。プログラムの前半部分でヨコトリ2020の作品やアーティスト、専門家たちから受けとったものを基盤として、テーマや方法を考え、それぞれが実験や実践をしてみる。その結果を持ち寄って、そこから何がわかったのか、何を得たのかを討議するというようなサイクルを何度か繰り返した。実際にやってみることと討議により個人の体験が共有され、グループとしての探究になっていく過程で、次にやるべき内容が立ち現れてくる。結論があるのかどうかもわからないことに取り組む不確定さはあったが、逆にひとつひとつの小さな発見や、やってみたことについて話をするというプロセスを通じて、それらが確かな経験としてグループ内に定着していった。● 2021年2月28日にオンラインで実施した成果発表会には、第6回（11月8日）には「みる」ことについて考えるというテーマでワークショップをおこなった全盲の広瀬浩二郎さんが参加、それぞれの発表に対してコメントしてくださった。この成果発表会は、各グループが後半部分で発展させていった活動を全員で共有し、広瀬さんにも言葉を通して伝える時間となった。● 最終的に参加者の中高生にとって印象に残ったのは、「みる」ということについて改めて考えたことと、そのプロセスを経て現象の見方や捉え方が「かわる」ということだった。したがって記録誌のタイトルは、「みる」と「かわる」（変化、変容）の間に「なみなみ曲線」のおおきな矢印を配置することになった。プログラム後半において、「こども探検隊」のようなわかりやすいアウトプットはできなかったが、自分たちでテーマや方法を見出して展開させるという意味では、中高生の自発性や創造性がこれまで以上に際立ち、私たちスタッフは、そこにまた新たな可能性を感じた。

横浜美術館　教育普及グループ　教育プロジェクトチームリーダー
主任エデュケーター／主任学芸員
端山 聡子

第1回｜8月23日［日］

はじめに

- 最初は緊張しましたが、他の人たちも優しそうで安心しました
- 作品の写真を見て、より一層その作品を生で見てみたいと思った
- 作品を作る工程や、作り方を聞くことができる機会ができて、とてもうれしい
- アートって、作る・感じる・共有するという3段階があってこそ成り立つのかな

オンラインで自己紹介

当初の予定よりも3か月後ろ倒しとなったプログラム初回。中高生はオンラインで集合し、画面ごしに顔合わせを行った。まずは自己紹介を通してお互いについて知り、ヨコハマトリエンナーレ2020についてのレクチャーを受けた。展覧会のコンセプトやつくり方について理解を深めたところで、グループに分かれて、次の回の講師である青野文昭さんの作品を鑑賞。作品の見た目や素材、作り方、意味について、気づいたことや考えたことを共有しながら、青野さんからどんなお話を聞きたいか、アイデアを出しあった。

レクチャーの様子［主席エデュケーター：関 淳一］

作品画像をみながらグループディスカッション

- 机が背負ってきた、経験してきた記憶、それを船に乗せて（つなぎあわせて）新たな旅へと再生させているように感じた
- 「広い世界を机だけで学んでいないで船を使って冒険しよう」という意味？

第2回｜9月6日［日］

アーティストと出会う①
青野文昭さん

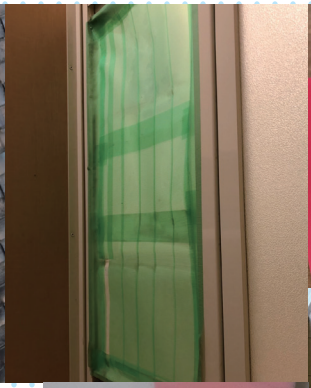
青野文昭さん

青野文昭さん展示風景［ヨコハマトリエンナーレ2020］

アーティストの青野文昭さんによる、過去の作品や、制作のコンセプトである「なおす」ことについてのレクチャー。前の回に話し合った「青野さんに聞きたいこと」を受けて、「もともと違う場所にあるもの同士がつながっているのはなぜか?」「なぜ机やコップのような身近な素材を使っているのか?」などの質問にも答えてもらった。最後に青野さんから中高生に対して、青野さんのフィールドワークをヒントに、「身近な物の中から“なおされたもの”を探して、写真を撮る」というテーマが与えられ、各自取り組んだ。

その後、第3回のゲストである新井卓さんの作品をグループで鑑賞。新井さんへのインタビューの内容を考えた。

中高生が見つけた“なおされたもの”



中高生が撮影した写真

1 2 3
4 5

❶ 置物が折れてしまったので
ボンドでくっつけた。
❷ お風呂場の扉を一時的に修復したものです。
実はあれはクリアファイルを
つけて修復してます。
❸ 割れたプラスチックの箱を接着剤で
直したものです。自然とできたギザギザの
柄が稲妻のような迫力のある
かっこいい柄になりました。
❹ ぬいぐるみの裂けてしまった部分を
糸で繋ぎ合わせて、直しています
❺ 学校で撮影したものです。何度もタイルが
貼り直されたことがわかり、これは古い
校舎ならではだなと感じました。

第3回｜9月20日［日］

アーティストと出会う②
新井卓さん

中高生がインタビュアーとなり、写真家の新井卓さんに質問を投げかけてみた。制作技法やコンセプト、展示の工夫についての質問のほか、新井さんの中高生時代について、好きな色、得意な家事など、色々な角度から新井さんの人物像にせまった。

新井卓さん展示風景［ヨコハマトリエンナーレ2020］

中高生と新井さんの Q&A

Q. どんなことから影響を受けて千人針の作品をつくったのですか？

A. 広島の平和記念公園で見た千羽鶴の起源をたどっていくと、千人針に行き着いた。千人針を縫った当時の人たちの気持ちを追体験するために、針で縫う代わりにダゲレオタイプで千枚の写真を撮るという作業を行ってみた。

Q. 見ている人の姿が反射して見えにくいのに、なぜ銀板で写真を撮っているんですか？

A. 写真を見るときに自分の顔が写ることで、安全なところから傍観するのではなく、「自分は写真を見ているけど、写真も自分を見ている」という状況をつきつけられる。

Q. 作品はモノクロが中心ですが、好きな色はなんですか？

A. 日によっても違うけど、夕焼けの時の、赤とオレンジの中間のような朱色と、日が沈んだ後のような群青色。

Q. 一つの作品の制作にかかる期間はどれくらいですか？

A. だいたい10年くらいのサイクル。実際に制作をしているのは1年だとしても、10年後くらいに意味が分かってきて、次の作品につながる。

Q. 新井さんにとって、アートの社会に対する役割はなんですか？

A. 社会的なタブーや規則を問い直すこと。場合によっては、そのボーダーラインを動かそうとすること。

画面ごしのインタビュー

新井卓さん

第4回｜10月4日［日］

ヨコハマトリエンナーレ2020を知る、みる、話す

蔵屋美香さん

展示見学（ロバート・アンドリュー作品）

3回のオンラインでの実施を経て、はじめて美術館に集合!はじめに横浜美術館館長の蔵屋美香さんから、ヨコハマトリエンナーレ2020の特徴についてお話を聞いた後、現代アートとはなにか?という問いについて一緒に考えてみた。ヨコトリの展示作品と横浜美術館の所蔵作品を比べてみることで、「わけが分からない」と言われる現代アートには、自由で多様な表現方法や身体全体をつかった体験など、いくつかの特徴があることが見えてきた。その後グループにわかれ、みんなで選んだ作品を展示室でじっくりみて、意見や感想、気づいたことを共有しあった。同じ作品でも人によって見方が全く違うこと、他の人の考えを聞くことで作品の印象が変化することを実感した。

上：展示見学（ツェリン・シェルパ作品）
下：グループディスカッション

- 初めて見たときは「こんなものがあるのか…」という衝撃?が先行してたけど改めてじっくり見たことで自分の中でもビックリする位いろいろな思いがうまれた
- みんな感じ方がちがうところがおもしろかった
- どうしてこれを作ったのかというのが分からないものもあってとても考えさせられた

第5回｜10月11日［日］

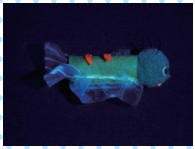
アーティストと出会う③
竹村京さん

アーティストの竹村京さんによるワークショップ。それぞれ持ち寄った「壊れてしまったけど捨てられないもの」を素材に、ものを薄い布で包み、壊れてしまった部分に蛍光シルクの糸を重ね合わせて縫うという竹村さん独自の方法で、「なおす」行為を体験した。なおし方は、同じ所を重ねて何度も縫って面をつくったり、全体の縁を囲って線で表現したりと人それぞれ。手に入れた経緯や壊れ方、捨てられない理由が一つ一つ異なっていたことが、なおし方の違いにも表れていたのかもしれない。縫い終わったら、電気を消してオレンジ色のメガネをかけ、なおした物にブルーライトを照射。縫ったところが蛍光色に発光し、幻想的な光景が広がった。

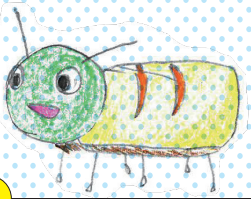
竹村京さんとのワークショップ

針と糸で「なおす」

ブルーライトを当てて糸を発光させて見る



中高生の「なおした」もの



- 竹村さんの言ったことで、「じょう仏させる」と「まだとっておきたくなる」と言ってたので、仏壇を思い出しました
- みんなの作品も見て、いろんなくるみ方やぬい方があり、とてもおもしろかった
- 光る絹糸を初めて見たので、感動しました

第6回｜11月8日［日］

「みる」ことについて考える
広瀬浩二郎さん

広瀬浩二郎さん

民族楽器やおもちゃを触ってみる

国立民族学博物館の准教授、研究者であり、視覚に障がいのある当事者でもある広瀬浩二郎さんを講師としてお迎えした。この日のテーマは「みる」。はじめに、「みる」という言葉を表す漢字や英単語を思い浮かべながら、「みる」ことの多様性について考えた。その後広瀬さんと一緒に、視覚を使わずにいろんなものを「みる」ワークショップを通じて、手触りや音から色々なことを想像する体験をした。最後の広瀬さんへの質問コーナーでは、お仕事や普段の生活についても聞くことができた。目が見えない広瀬さんと一緒にあえて「みる」ことについて考えることで、「みる」という行為の可能性や、自分のものの見方についてもあらためて考えるきっかけとなった。

見えないものを触ってみる

手を使って「みる」

見る　観る　診る

- 目を閉じて物に触れると、手でカタチを探りながら頭の中でその物を少しずつ描いて想像していく感覚があった。
- 実際に「見て触る」のと「見ないで触る」のとをやってみて、全く違うことが分かり、改めて自分がどれだけ視覚情報にたよっていたかを知りました。
- 視ることに固執するのは良くも悪くも絵画をこり固まらせるような気がする。

あとがき

感染症拡大の中で波乱万丈のスタートを切った「中高生プログラム2020」も、この記録誌の発行をもってようやく終わろうとしている。企画段階から番外編まで変更の連続で、担当者の立場としてはハラハラすることばかりだったが、プログラムが自分の予想を超えて展開していく様を見ることができたのは大きな収穫でもあった。● 私がなにより惹かれたのは、アーティストや専門家、作品との出会いを通じて生まれたアイデアが変容していく過程だ。「なおす」ことへの興味は、野菜をすりつぶし、液体窒素を使って砕くという、当初のキーワードと全く異なる取り組みにつながり、「見る」という行為は、お風呂場や海や川や部屋の中で、さまざまな感覚を使って水と触れることによって表現され、「時間」という抽象的な概念は、メンバーそれぞれの身近な場所の中に、サイズの違う靴や溶けていく氷といった具体的な姿をもって現れた。● 目の前のものをよく見て、自分たちで問いを見つけ、手を動かしながら深めていく。結果を見てまた問いに立ち戻ると、はじめと違う意味が立ち現れてくる。こうしたプロセスは、美術館内でのツアーやワークショップといった枠組みを手放し、活動のゴールそのものを中高生と一緒に作っていく中で初めて得られたものだった。結果として、アートとの出会いの中から浮かび上がったキーワードは、野菜や水や傘や、身の回りの様々な素材を新たな視点で捉えなおすことを促した。家の中にある見慣れたものに、昨日までと違う意味を与える取り組みは、いわゆる鑑賞や制作とは異なる形で、ある意味でとても「美術らしい」実践となったと考えている。そう思うと、実施方法や時期、活動場所に関して今回課せられた新たな制約は、裏を返せば、これまでの制約からの解放につながったのだろう。● 私自身、刻々と変わる状況の中でのプログラムの運営において、自信をもって判断できたことは多くはなく、常に迷いながら一つ一つ選択していった。そのプロセスは、答えのない問いに対する中高生の試行錯誤と実はよく似ていたのかもしれない。だからこそ、最初に決めたことに捉われず、柔軟にアイデアを発展させる彼らの姿にはとても触発された。この記録誌が、中高生による創造的な営みの一端を伝えるものになっていれば嬉しい。

横浜美術館　教育普及グループ　教育プロジェクト
鑑賞教育エデュケーター／学芸員
古藤 陽

謝　　辞

新型コロナウイルス感染症の拡大という未曾有の事態において、当初はプログラムの開催そのものが危ぶまれた中、多くの方々のご支援により当プログラムを最後まで実施することができました。実施にあたっては、オンラインという新たな手法を導入し、その可能性を探索するとともに、プログラムの枠組みや内容に関する問い直しと変更を繰り返し行いました。こうした中で、安全な開催を前提としつつ、プログラムの根本的な主旨やあり方を再検討できたことは、今後につながる貴重な財産となりました。度々の予定変更やオンラインへの移行にともなう細かな調整にも真摯にご対応いただいた講師の皆さまや、先が見えない中で最後までプログラムに参加してくれた中高生をはじめ、プログラムの実施を支えてくださった関係者の皆さまに、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

●

横浜美術館
教育普及グループ
教育プロジェクト

【中高生プログラム参加者】

五十嵐 久子（中学2年生）｜宇佐美 友悠（高校2年生）
恩田 まひろ（高校1年生）｜木暮 万葉（高校2年生）
髙木 咲空（中学1年生）｜高山 志保（中学3年生）
竹永 嵩一郎（高校1年生）｜玉田 智世仁（中学1年生）
知識 つぐみ（高校2年生）｜福島 祐希（高校2年生）
本間 愛深（高校2年生）｜松村 彩奈（中学1年生）
山下 泉澄（中学2年生）｜山田 埜生（中学2年生）
米林 慶晃（中学2年生）｜和久井 翔太（高校2年生）
渡辺 佳子（中学2年生）

【スタッフ】

教育普及グループ主席エデュケーター
関 淳一
教育プロジェクトチームリーダー
端山聡子
教育プロジェクト
古藤 陽｜北川裕介
六島芳朗｜石塚美和

みる
かわる

横浜美術館中高生プログラム2020
ヨコトリ2020を体験しよう！伝えよう！［記録誌］

発行
横浜美術館
教育普及グループ 教育プロジェクト
220-0012 横浜市西区みなとみらい4-3-1
PLOT 48［横浜美術館 仮事務所］

発行日
2021年10月

編集
プログラム参加の中高生有志
横浜美術館 教育普及グループ 教育プロジェクト

デザイン
NDCグラフィックス

撮影
加藤 健（＊マークのついた写真）

印刷
株式会社ダイトー

表紙および冊子タイトルは中高生の提案による

YOKOHAMA MUSEUM OF ART